神が共におられる

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原口, 尚彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24613

「神が共におられる」

キリスト教学科長　原口尚彰

創世記、第二八章一〇章～二二節

10ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。11とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。12すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。13見よ、主が傍らに立って言われた。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地をあなたとあなたの子孫に与える。14あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。15見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

16ヤコブは眠りから覚めて言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」
17そして、恐れおののいて言った。
「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」
18ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、19その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。
20ヤコブはまた、誓願を立てて言った。
「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、21無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、22わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

聖書の中において時折、神は「アブラハム・イサク・ヤコブの神」（出三・六、マコ一二・二六他）であるという言い方がされますが、今日の箇所はイスラエルの族長の一人であるヤコブに関するエピソードを伝えています。ヤコブはイサクの双子の息子の一人でしたが、双子の中では出産の

際に先に出て来たエサウの方が長子であり、ヤコブは弟とされていました（創二五・二五）。長じてエサウが狩人になり、ヤコブはテントの周りで仕事をするものとなりました。ヤコブが上手く立ち回って、エサウの長子の特権を奪い（二五・二五―三四）、さらには、長子に与えられる父親の祝福を奪ったので（二七・二八―二九）、兄のエサウはヤコブを恨んでその命を付け狙うようになりました（二七・四一）。そこことを聞き及んだ母親のリベカの勧めに従って、ヤコブは住んでいたベエル・シェバから旅立ち、メソポタミアのハランに向かうことになりました（二八・一―五）。ハランは先祖のアブラハムがかつて住んでいたところであり、その親族がまだその地に住んでいました。

ヤコブがハランに向かう途中で、ある場所に来た時に日が暮れたので、野宿することになり、路傍の石の一つを取って枕にして横になり、眠り込んで一つの夢を見ました。ヤコブが夢に見たのは天に達するような長い梯子（階段）が地面に立てられている光景であり、その上を天使が上がったり下りたりしていました（二八・一〇―一二）。すると、神がヤコブの傍らに立ってこう言いました。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって

祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこに行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない」（二八・一三―一五）。

夢から醒めたヤコブは、その場所を神がおられる神聖な場所としてベテル（神の家）と名付け、旅から無事に帰還できたら、その場所に神殿を建て、収入の十分の一を捧げるという誓いを立てることになります（二八・一六―二二）。

この箇所を読むといつも思い出す一つの経験があります。それは、数年前、オランダのアムステルダムにあるユダヤ人の歴史に関する博物館を訪れた時のことです。場所を探し回って夕方にそこに着いたのですが、閉館前だから、明日もう一度来るように受付の係の男性に言われました。自分は日本から来た旅行者であり、明日は日本に帰らなければならないので、短い時間であっても展示物を見せてくれと私が頼むと、それなら分かったから素早く見てくれということになりました。展示されていたのは、四〇〇年にわたるオランダのユダヤ人たちの歴史に関する資料でした。彼らの歴史に関する説明があり、かつてのユダヤ人たちの居留区やシナゴーグ（礼拝堂）の写真や、ユダヤ人たちが使っていた様々な道具や品物がありました。すなわち、最初にオランダにやって来たユダヤ人は、一五世紀末に宗教的迫害を避けるためにイベリア半島から来た人々であり、セファディと呼ばれました。その後、一七世紀には三〇年戦争の戦乱を逃れて、東欧からユダヤ人たちがオラ

ンダに移り住み、アシュケナージと呼ばれました。当時のヨーロッパでは比較的宗教的に寛容であったオランダにユダヤ人たちの居留区が出来、ユダヤ人社会が形成され、以後、オランダの社会に根付いていったのも当然の成り行きでしたが、一九四〇年代になり、ナチス・ドイツの侵攻を受けてその支配下に置かれると、状況は一変して、ユダヤ人たちの公民権は制限され、彼らの多くは強制収容所に送られて殺されました。しかし、生き残ったユダヤ人たちは戦後にユダヤ人社会を再建し、宗教生活と社会生活を続けていることが語られていました。

そこまで読んで来た時に、受付の人がやって来て、もっと面白い物があるから見せてやると言って二階の小さな部屋に案内してくれました。そこは全体が暗くなっていて、床は砂漠にしつらえてあり、一人の遊牧民の格好をした若者の人形が石を枕に寝ていました。空には満点の星が出ており、一つの梯子が地面から天に向かって垂直に立っていました。つまり、それは旧約聖書の物語の場面をユダヤ人の子供向けに演出したものであり、訪問客はヤコブの人形の横に寝そべって空と梯子を眺める格好になっていました。私がこれはヘブライ語聖書のヤコブの梯子の話だねと言うと、案内の人はその通りだと言いました。そこで、彼に今日のユダヤ人にとってこの話が何故そんなに重要なのかと聞くと、それはこの話が、私たちが何時どこにあっても神が共にいることを示している話だからだと答えました。成る程、それは一理ある話だと思いました。ユダヤ人たちは、歴史の中で何度も国を滅ぼされ、国を追われて世界中に離散する生活を続けて来ました。オランダのユダヤ人

たちも、元々は迫害や戦乱を逃れてやって来た人たちです。その人々にとって、逃れて行く先がどこであっても、神は共におられ、決して見捨てることがないというこの箇所のメッセージは大きな励ましになって来ただろうと理解出来ました。しかし、天地を創った神はユダヤ人の神であると同時に、異邦人の神でもあり、全世界の神でもあります。いつでもどこでも神が共にいるということは、ユダヤ人に対してだけでなく、世界中の人たちに開かれていると思います。特に、神の御子キリストの誕生を待ち望む待降節にあたり、インマヌエル（神が私たちと共におられる）ということの意味を改めて思い起こしたいと思います。